

武田裕子先生
附属病院地域医療部
琉球大学医学部



レポーター：木村 眞司
札幌医科大学医学部地域医療総合医学講座

沖縄県中頭郡(なかがみぐん)西原町にある琉球大学医学部附属病院に、武田裕子先生をお訪ねした。1月の上旬であったが、取材者の住む札幌でいえば9月上旬というところであろうか。那覇から車で1時間ほどのところに西原町はあった。

武田先生はいつものスマイルで迎えて下さった。元気がまわりに発散しているようなお方である。沖縄に赴任して2年弱。沖縄大好きの「ないちゃー」である武田先生にお話しを伺った。

琉球大学の歴史は戦後まもない昭和25年にさかのぼる。沖縄初の大学として開学し、本土復帰とともに国立大学となった。附属病院は昭和45年(1970)に保健学部附属病院として設立され、医学部設置にともない、昭和56年、医学部附属病院となった。

地域医療部の専任教官は1人。武田先生のみである。部には他に、技官の瑞慶覧(ずけらん)涼子さんと事務の方が2名(竹島華恵さんと鶴浦良子さん)働いておられる。筆者が訪れたときには、放射線科所属の研修医清水先

生がローテート中であつた。部長は精神科の教授が兼務している。以前は地域医療部には3つの教員ポストがあり疫学的な研究が中心に行われていたが、沖縄・アジア医学研究センター設立の際にそちらに人員が移されたとのことである。

外来業務は、総合診療センター(これは組織的には地域医療部とは別)の外来を週4日行っている。ここでは第1・2・3内科、精神科の医師との協力体制が敷かれている。その診療内容については本誌8巻2号(前号)にも発表された。

実際に多い患者は、身体化障害とか、パニック障害、不安神経症、高血圧、糖尿病、などなど。

「1日多くて10人行かないくらいかなあ。」

外来では、臓器別の専門家が担当するブースは器質的な疾患の診断と治療が主体になる。武田先生のところは、何ヶ所もかかってきたけど、まだ心配で来られたという方が多い。その中にも器質的な疾患を持った患者さん

が当然いるわけで、一緒に外来をやっている専門医との密接な協力を心掛けている。

「専門家の領域に合っている場合はお願いしたり、その場で診ていただいたり、相談に乗っていただいたりします。」

不安障害や軽度のうつ状態、パニック障害の患者さんも多い。精神科医との相談も大いに役立っている。

病棟は現在担当していないが、総合医的な見地からの入院患者へのコンサルテーションを受けている。

地域医療部のその他の活動についても伺った。

1. 地域保健・医療・福祉に対する支援

—医療連携の促進—

「(沖縄のような)島嶼(とうしょ)県において地域医療の充実を図るには役割分担・医療連携が一番重要という認識に立っています。医療連携を促進するような仕事をしていきたい。医事課職員やソーシャルワーカーが配置されれば、もう少しきめ細やかな活動ができるのではないかと思うんですけど、今後の一番の課題です。」



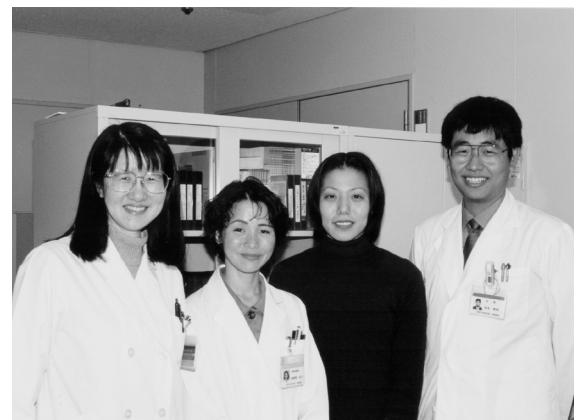
琉大附属病院

琉大病院が地域に求められているものは何か、今の問題点は何か、自分たちの課題は何かを明らかにしようとアンケート調査を行い、『地域医療機関と琉大病院の連携強化のためのアンケート調査報告書』をまとめた。沖縄県の全ての医療機関(医科)(病院93 診療所709)にアンケート調査をしたのである。内容は、連携の有無、連携上の問題点、琉大病院に望むこと、などなど。回答には、多くの厳しい意見、励ましの言葉が記されていた。病診連携部門整備の要望も多く聞かれた。また、地域の診療所で学生実習や卒後研修を行う可能性について聞いたところ、嬉しいことに119もの診療所が協力しますと回答してくれた。

「地域に開かれた地域医療部になることを目指しています。」

そのために、地域の医療者を対象としたセミナーも開催している。内部への配慮も、院内の各診療科に対しても地域の医療・福祉に関する情報提供を行っていく計画である。

—離島医療支援—



左より武田先生、瑞慶覧さん、竹島さん、清水先生の皆さん

離島の多い沖縄県。当然、大学病院に対しても期待が大きい。離島への医師派遣や、テレビ会議による精神科診療が行われている。

「もっと、病院としての取り組みが出来ればと個人的には思っています。」

そのための啓蒙や働きかけもしていきたい。今度創設される沖縄県へき地医療支援機構の活動にも協力する。

研究活動の一環として、離島医療支援における情報通信技術の活用に関する研究を行っている。

—地域住民に対する健康教育・啓蒙活動—

老人福祉センターや中学校などで、講話とかセミナーを行う。禁煙教育や上手な医者のかかり方などなど。『医者にかかる10箇条』という小冊子があって、これを使って講話をする。すると、かならず質問の時に手が上がって「先生はそういうけど私の先生にはとても質問なんかできません」あるいは「怒られます」など、いっぱい言われる。

「今からのお医者さんにはそういうことがないように琉球大病院では今こういう教育をしているので、期待して待って下さいね、といって模擬患者参加型コミュニケーション実習のお話をしてるんです。」

武田先生は、あくまで前向きであり、ポジティブである。

2) 卒前医学教育・卒後臨床研修に対する支援

—地域医療を実践できる医師の養成—

琉球大学にはプライマリ・ケアに興味を持つ学生は多いと実感している。しかし、学生には情報が不足している。学生の関心を高めるため、

講義を行ったりセミナーへの参加を促したりすることもしている。家庭医や総合診療を目指している学生の良き相談相手でありたい。教員が1名であり入院診療は行っておらず、現時点では臨床実習の学生が定期的に回ってくることはない。しかし、夏休みなどに学生が総合診療科外来実習を希望して来ることもあり、そのような機会を逃さずにプライマリ・ケア・マインドを育てることに腐心している。

「診療所実習のコーディネートをすることも大切な仕事のひとつです。」

「離島医療をやりたいと思って入ってきても、実際それを体験する場というのが6年間にほとんどないわけですよ。教育をしないでいて、背中も見せないで、学生が専門医志向になるのを“入試の面接で言ったことと違う”なんて学生を責められるのかなあと私は思うんですね。卒前教育でプライマリ・ケアをもっと体系的に教え、きちんとした枠でもって実習できるようなプログラムが必要だと思っています。」

武田先生は、沖縄県でプライマリ・ケア・ムーブメントを作りたいと思っている。地元の病院や診療所医師ら(浦添総合病院、県立中部病院や那覇病院、ファミリークリニックきたなかぐすくの先生方)と熱く語り合う。

「アンケートでもそうだったんですが、プライマリ・ケア教育を充実してほしいというものすごい要望があるんですよ。県下の診療所や病院の先生方から、だからこれを追い風にして頑張りたいと思います。」

3) 研究活動

地道な研究活動も行っている。例を挙げれば、



カチャーシーを踊る武田先生ら

外来診療教育のあり方に関する研究。これは聖ルカ・ライフサイエンス研究所の委員としての共同研究で、全国80の医学部医科大学と、研修指定病院389施設を対象にアンケートを行ったもの。地域医療部のメンバーがフル回転で成し遂げた仕事である。我が国の外来教育の現状と今後の課題について調べ上げた。外来教育の重要性が強く認識されていたことに意を強くしている。

「教育スタッフの不足とか、外来ブースが足りないとか、物理的な問題があってできないという回答が多かったですね。その辺はよい医療を提供するためにはそれだけの投資が必要ということが示された結果かと思っています。」

その他にも、医療機能評価機構の作業部会のメンバーとしての仕事や、診療所実習のための医師の教育スキルのトレーニング (faculty development, FD)に関する研究。後者に関連しては海外視察もした。

「よいトレーニングプログラムを確立し、沖縄から全国に広がっていけばいいなあと

思っています。夢ですけどネ。(にっこり)」

まだまだ枚挙にいとまがないが、問題志向型学習チュートリアル(problem-based learning tutorial)の進め方についての研究も、医学教育学会の卒前教育委員会のメンバーとして行っている。

最後に今後の抱負を伺った。

「やはり琉大病院が今以上に地域に貢献できる病院になることが目標です。そのためには、地域の医療機関との連携が充実し、役割分担が進むような何らかのシステムが必要だと思うんですね。私たちがそれを担うことができたらと思います。」

「沖縄県は島嶼県ですから、離島診療所も含めて具体的に支援していきたいと、実現させなければいけない夢だと思っています。1人で言っているだけでは難しいので、理解していただけるように院内に向かって働き掛けていく必要があります。」

県立病院・行政・医師会との協力体制をさらに推し進め、県民にとってのより良い医療を実現していきたい。

「私たちがそのインターフェイスになって進めていければと思っています。」

「沖縄にはコミュニティーの力があるんです。地域力があるんですよ！」

地域に開かれた地域医療部になるのがパワフルな武田先生と優秀なスタッフの目標である。最後は皆さんでカチャーシー(沖縄の踊り)を踊って締めくくっていただいた。